

【講演記録】

大衆の中で大衆に学ぶ —母校・東亜同文書院を回顧する—

東亜同文書院大学第 41 期、元NHK中国語講師 宮田 一郎
(2014 年 10 月 26 日 広島県立美術館)

ただ今ご紹介たまわれました、宮田一郎でございます。ご紹介にございましたように、私は東亜同文書院大学 41 期生でございます。昭和 15 年、西暦では 1940 年でございますが、その 4 月入学いたしまして、昭和 19 年 9 月、戦時繰り上げ卒業とあいなりまして者でございます。繰り上げがちょうど半年という計算になりますけれども、実はその前年の昭和 18 年 12 月 1 日、いわゆる学徒出陣によりまして、戦場に召されておりました、実際に書院に学びましたのは、4 年に満ちませんでした。ちょうど昭和 19 年 9 月、南京の軍営におりました時に、卒業証書をいただいたのでございますけれども、それを見ながら「もうこれで母校に戻ることはなくなったのか」「たとえ生還してももう母校に戻ることはないんだ」「もう二度と学生として朱の大きな門をくぐることはないのか」と思いますと、かつて書院で過ごした日の思い出の数々が、走馬灯のように脳裏を巡りまして、手にした卒業証書にいつしか、ポタポタ涙がこぼれ落ちておりました。本当に、思えば懐かしいことでございます。あれから、ちょうど 70 年でございますけれども、私たちにとりましては、いつまでもそれは「きのう」であります。

ところで、ちょうど本日のような催しが、2011 年 8 月に富山市でございました時に、愛知大学東亜同文書院大学記念センターのセンター長をなさっておりました馬場毅先生が、書院の沿革についてお話になられまして、その時に先生は「書院はいくたびか移転をしておるけれども、常に一貫して租界の外にあった。租界の中に入ることはなかった」ということを力説しておられました。私はうかつにも、そのことにそれまで留意しておりませんでした。しかし考えてみますると、これはまさに、書院の本質を突いております。思いま



するに、書院は生涯を中国の社会で暮らし、中国の大衆とともに生き、ともに働く、そういう人材の養成を目的としておったのでございます。そのためには、書院は常に中国大衆の街である、租界の外になければならない。これを、書院を運営された先生方は、一貫して取ってこられました。これは非常に正しかったと思います。

もし書院が、外国人が特権を持つ租界の中にありましたらどうなったであろうか、特に、「長崎県上

海」といわれておりました、共同租界の虹口地区、ここにあったのならどうなったでしょうか。その当時、虹口地区には数万という日本人居留民がおりまして、日本の商店があり、日本の寿司屋さんがあり、日本のいろんな物を売る店があり、まったくそれは日本人の社会でありました。そして海軍陸戦隊という、アメリカの海兵隊にあたる軍隊が駐屯して、治安の維持に当たっておりました。そこには日本人向けの病院もありました。それから、居留民の子弟を養成する日本人小学校・中等学校などもございました。もしそこに書院があったのならば、はるかに経営は楽で、いろんな点で便宜を受けたと思います。ところが書院はあえて、その道を選ばなかった。これは非常に正しい選択であった、と思うのであります。

私たちが学びました学園は、交通大学（現 上海交通大学）の校舎でありました。ちょうど虹橋路というところにありました学園が、第二次上海事変の時に中国兵に火を放たれまして、焼失いたしました。それで、内陸部に移りまして空き家となっておった交通大学の、これは中国では非常に著名な大学でございますけれども、そのキャンパスを利用しておったのでございます。大きな学校の正門を一步出ますと、そこは中国人ばかりの街でございまして、近郊からの買い物客でにぎわう徐家匯、上海では「ジカウエイ」と言っておりましたが、そこに続いておりました。私たちは放課後とか、あるいは部活動の後などは、毎日のようにその界隈に出かけまして、夕飯までのひと時を、ぶらぶらしておったものでございます。時にはもう、夕食を待ちかねまして、露天に近いような掘立小屋のラーメン店に入りまして、ラーメンなどをすすっております。ちょっとした日用品を買うのもその街でした。そして街には、質屋さんもありまして、我々は適当に利用しておりました。

そうこうしているうちにだんだんと、その街の人と顔見知りになりまして、道で会ったら目礼を交わす、というような仲になってまいりました。特に、慣れて彼らと交わす言葉が、少しずつ聞き取れるようになる、また私たちも、片言しゃべれるようになりますと、中国のそういう街の人と短い会話を楽しむ、というようにもなっていました。それから、学校の付近にバラック、掘立小屋がございまして、そこに人力車夫などが住んでおりましたけれども、その人力車夫などとも話を交わす機会がございました。土曜日曜には、日本人の住む虹口地区に出かけまして、郷愁をまぎらわしておったものでございますけれども、遊びほうけて終電に遅れる、という時には、夜道をとぼとぼ歩いて帰ったものでございます。その頃は人力車夫が、仕事をしまつて家へ帰る、そういう時刻でございますので、ときどき道連れになりました。「どうだ、車に乗らないか」「いや、そんなお金持ち合わせてません」「いや、金はいらない。さあ、乗れ。その代わり、走らんからな。歩いて行く。ダベりながら行こう」ということになって、よく校門の前まで送ってもらうようになりました。その人力車夫の人などは、我々を「南洋大学の学生さん」と呼んでいました。交通大学は「北洋学堂」、これは北京大学の前身でございますが、それに対する「南洋学堂」が前身でございますから、街の人には「南洋大学」と呼んでいる人が多く、それで我々をそのように呼んでいたのですが、とても親しみがこもっていました。そして、「いつ上海に来た」とか「戦争で家が焼けたのでこっちへやってきた」「日本兵はひどいもんだ」「俺の家の裏でも、だいぶ日本兵にやられたよ」というようなことを言っておりました。まるで、私たちを日本人の外に置いたような感覚で話しておりました。

こういう、中国の人との交わりの中で、我々は育ち、そしてその中で、我々それぞれの中国観・中国人観というものを持つようになりました。それがどういうものであるかとい

うことは、一言では申し上げられませんが、その後いろんな方と一緒に中国を語るようになりまして、どうも我々の中国観とはちょっと違うな、と感じることがしばしばでございました。これは、当然かなと思います。それから、だいぶのちになりますが、一時『醜いアメリカ人』『醜い日本人』というような本がはやったことがございます。中国につきましても『醜い中国人』という本が出版されました。それを読みますと、いろんなことが書いてございますが、その中に書いてあるたくさんのご事情も、我々が早くに、中国人の大衆との接触の中で見聞したり、あるいは自ら体験したりするようなことがございまして、我々の中国観・中国人観の中にも、そういったものも含まれております。我々のもつ中国人観は、ちょっと複雑かもしれません。そのことにつきましては、またそのうちお話する機会があればと思っております。

先ほどのご紹介の中にもありましたように、書院、東亜同文書院のことを、これから「書院」と簡単に言わせていただきたいと思います。書院はもともと、ビジネススクールであった日清貿易研究所から始まりまして、それが4年制の高等専門学校になり、そして旧制大学となっていくものでございますけれども、ビジネススクール特有の、実学を重んじるという伝統は、しっかり受け継がれていっているように考えています。特に中国語教育は、実務に徹底しておりました。かつて日本では外国語、特に英語でございまして、「読む」「書く」が中心でございましたけれども、書院は「話す」「聞く」が中心でございまして、試験なども、漢字で書いたものを通さずに、中国人の先生が教室に来られまして、読み上げられる、それをそのまま日本語に訳して提出する、と、そういった試験をするほどに、「話す」「聞く」に重点を置いたものでございました。

しかし、当時の中国では、北京語はさほど通用しておったわけではございません。北京語を、当時中国はクオユイ、「国語」として、普及に努めておりました。当然書院でも、北京語を中心に教えたわけでございますけれども、北京語がどんなに上手になっても、どんなに聞き取れるようになっても、上海では全く手が出ません。そういう時代でございました。校門を一步出ますというと、そこはもう上海語の世界でありまして、ラーメン一杯注文するにしても、あるいは歯ブラシ一本買うにしても、上海語でないとラチがきません。電車やバスに乗りましても、行先地や到着停留所を知らせる車掌のアナウンス、これは全部上海語です。そういうわけで、我々は教科で北京語を教わる以前に、上海語を自分で何とかモノにしなければならぬ、そういう状況でございました。我々の上海語の先生であったのは、街の人たちです。ラーメン屋のおっちゃんであったり、あるいはお菓子屋の丁稚さん、あるいは路上でピーナッツを小袋に分けて売るおばさん連中、それからバスの車掌さん、そういった人たちが、我々の先生でした。我々が言い間違えると、それらの先生方は非常に親切に、丁寧に直してくれたものでございます。そういう経験をして、我々は一つずつ上海語に慣れていきました。学校でももちろん上海語の教科が、必須として組まれておりました。これは学部にも、予科は2年でございましたが、予科を終わって学部に進んでから、坂本一郎先生、のちに神戸外国語大学の創設に参加された先生でございまして、坂本先生の授業が1年間ございました。しかしそれはもう、上海に着いて3年目のことでもございまして、それまでに同期生の多くは、ほぼ上海語の日常的な、初歩的な会話はできるようになっておりました。先生のほうも、それを前提にして教えられておったように記憶いたしております。ただ違うのは、我々が覚えた上海語は、街の大衆が話す、下町風のものであるのに対して、先生にお習いした上海語は、比較的高い階層で話される、かなり

格調の高いものでありました。

書院の学生が、北京語のほかに上海語を解するというのは、一つの有利な点でなかったかと思います。というのは、先ほど申し上げましたように、北京語だけ話せても、中国ではモノにならない、その点で有力な方言である上海語を解する、ということは大変有利な点であったことは言うまでもないでしょう。しかしもう一つ、大きな効用がございました。というのは、中国で政界・財界・官界・文化界などで活躍なされておられる方の中には、江南出身の方が多いわけです。長江デルタ地帯ですね、上海・蘇州といったあの一帯です。そういう方がお話になる、いわゆる共通語というのは、大変方言に傾斜したものでございます。これを聞き取ることは、なかなか容易ではありません。ところが書院の学生は、上海語をよく聞き慣れているものでございますから、そう困らずに、何とか聞き取ることができた、というような点、この効用は、たいへん大きかったのではないかと思います。

ちょうど私たちが学生の頃、時の東條英機総理が急きょ南京を訪問されたことがございました。その時、南京政府の主席（汪兆銘）とか、要人といろいろ折衝されるわけですが、日本から同行してこられました通訳官では全く歯が立たない。同席しておられました、大使館の清水董三^{とうぞう}公使が助け船を出されて何とか折衝できた、と聞いたことがございます。この清水董三公使というのは、「北の林出、南の清水」といわれた方です。林出というのは、林出賢次郎といわれる方でございまして、二十数年前ですかね、NHKスペシャルで「皇帝の密約」というのが放送されたことがあります。それは、林出賢次郎さんが満州国に向向して、「ラストエンペラー」溥儀の御用掛を務めて、溥儀皇帝が関東軍の総司令官とお会いになる、関東軍総司令官としては会えないから、全権大使ということで会うわけですが、その時の会見秘録を、いろいろ細かく書き取って、日本外務省に報告しておられた。それが陸軍の忌避に触れたこともあって、本省に戻られることになるわけですが、その人と相並ぶ両雄でございまして、同文書院 12 期、林出賢次郎は第 2 期でございましたが、清水董三さんは上海にも在勤しておられた、ということでございます。

このように、崩れた標準語を聞き取れるというのは、上海に育った一つの大きな利点であろうかと思います。かの文豪魯迅が書院で講演されたことがございますが、本日聴講者として参加の千賀新三郎先生から先ほどいかがだったところでは、授業の一環として行われたということにして、紹興（浙江省）出身の魯迅の、訛りのある中国語を聞き取るということは、当時書院だからこそできたものと言えましょう。

それから、いろいろ大衆の中で学ばせるという点では、書院生の大旅行もそうではなかったかと思います。この中国大旅行というのは、今日お見えてございます、あとで講演もなさいます藤田佳久先生によって内外に知られるようになったわけですが、書院では卒業に先がけて、学生が自ら何人かのグループを組み、自由にテーマを選び、自由に旅行先を決定し、1 ヶ月あるいは 2 ヶ月といった期間、中国を旅行するというようになっておまして、これなども、研究成果そのものというよりも、学校当局として最初はやはり、中国の大衆の中で学生を育てていく、そういう趣旨であったのではないかと考えております。私たちの恩師であります小竹文夫先生、中国史の専門家でありましたけれども、先生は書院 19 期でございまして、青海省にまで足を延ばしておられます。おそらく、青海省に入った最初の日本人ではないかと思うのでございますけれども、先生が遺されました、一行の旅行記によりますと「青海に向かうが、雨で前に進めない。西安に引き

返す。日本人、石原莞爾^{いしはらかんじ}氏と同宿。翌日、青海に向かう。石原氏同行」と載っております。石原莞爾というのは、ご存じのことでありましょう、のちに東條総理と対立して、陸軍中將で予備役編入されますけど、「陸軍に石原あり」と、柳条湖事件・満州建国で勇名を馳せた将軍であります。

ただ、私たちの学生の頃は、戦争によりそういう大旅行はできませんでした。ただそれに代わるものとして、一つの県城、日本でいう県庁所在地ですね、それを選びまして、そこに行ってそれぞれグループを組んで、それぞれのテーマを選び滞在して調査、もちろんこれは聞き取り調査が中心でしたが、調査をするということになっていました。これも大衆の中で学ぶという趣旨であったかと思います。わたくしは江蘇省の丹陽というところへ行きました。指導教官は愛知大学の創設に参加され、学長にもなられました小岩井浄先生でございました。丹陽というのは小さな県城でございましたけれども、言葉は非常に複雑で、呉語に準ずる方言で、北方語でもないけれども、上海・蘇州語でもない、というようなところでございまして、「スーパーヤン話」と言われておりました。「スーパーヤン」とは四つの門。東・西・南・北という城門でございまして。まずこの四種類に（言葉が）分かれる。それから、門外と門内とでまた言葉が違う。非常に複雑な言語でございまして、我々苦労したものでございますけれども、そこに1ヶ月近く滞在して、調査いたしました。私は中国の民俗、とくに血縁村落について非常に関心がありまして、それで城外の史家村^{しかふそん}という村落を選びました。そこは日本軍の歩哨線から約1kmまだ出なければならぬ、非常に危険と言えれば危険で、皆さんにご心配をかけたのでございますけれども、そこへ連日出かけまして、史という一族の歴史、どこから来ていつ定着したか、その自治制度、共通の学校とか、先祖の祭祀の経費はどこから出すか、そういうような掟や決まり、それから通婚圏、お嫁さんが来る・行く、その範囲がどんどん広がっていく、どの時期にどう広がるか、たとえば鉄道が開通した時に、広がっていくなどでございますけれども、そういうことの調査に当たりました。非常に聞き取りにくい言葉でございましたけれども、何とかこなすことができまして、それも上海で、いろんな方言を耳にしたおかげでなかったかと考えております。

このように私たちは、いろんな方面のお気遣いによりまして、書院という絶好の環境を持つ学校で育てられたわけでありまして、当時私たちも、生涯中国で、自分の骨は大陸で埋めるという覚悟でございました。そして、それにふさわしい、それを可能にするような基礎の力を育てていただいたわけでありまして、残念なことに敗戦により、帰国せざるを得ませんでした。したがって、私たちの同期生には、志に反して中国とはほとんど関わりのない職業に就いた者が少なくありませんでした。かえすがえす残念なことではございます。ただいづれも、青春の日を中国に賭けた思い・夢、それから書院生特有の中国観、そういうものを生かしまして、それぞれの日中友好の輪に皆が加わってきたように感じております。これは我々の、せめてもの慰めとするところであります。しかしその同期生、ちょうど私たちの期は、学徒出陣する時には200名を優に超えておりましたけれども、今は聞くところによりますと、20名そこそこということではございます。それも齢90をとうに超えまして、遠からず人生の終焉を迎えようとしているところでございます。

その今、非常に残念に思い、心が痛むのでございますけれども、日本と中国との関係が大変に悪化しまして、これ以上悪くなることはないかと思っておりますけれども、大変な時代に立ち入っております。しかもそれを解決する力は、我々にはもう残っておりません。それ

だけに、非常に切ない思いをしておるわけでございます。ただ、先ほど学長先生からもお話がございましたように、この書院の伝統を、愛知大学が引き継いで下さいまして、そこで学ばれた皆様が、各界にわたって活躍をしておられまして、そのご功績は、我々をはるかに超えておられます。これら方々の、これからのますますのご発展を期待し、お祈りすると同時に、我々の学校の伝統を引き継いで下さった愛知大学が発展され、日中・アジア、そして世界への貢献を進めていかれるよう、心からお祈りして、拙い講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。意を尽くさぬ点が多くございますが、お許しいただきたいと思います。多少時間をいただけるのであれば、皆さんから何かご質問があればお答えしたいと考えております。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。せっかくの機会でございますので、少し予定よりも早く終わっていますし、ご質問の時間をたくさん取らせていただこうかと思っています。どなたか、ご質問はありますでしょうか。はい、どうぞ。

質問者 A 先生がいらっしゃった場所を、ちょっと聞きにくかったものでございますから、もう一度教えていただきたいと思います。それからもう一つは、小岩井浄先生、当時は同文書院の専任教授であられたのでしょうか。

宮田 軍隊にいた時の場所ですか。私たちは学徒出陣で急に徴兵を受けるようになり、昭和 18 (1943) 年の 12 月 1 日に多くの学生が、南京にありました第 61 師団司令部に召集され、そこから工兵隊、歩兵隊、経理部といろいろ分かれて行きました。私は歩兵で、初年兵教育を廬州 (ろしゅう) というところで受け、予備士官教育をまた南京へ戻って、城外の金陵部隊というところで受け、その時に書院卒業の知らせと証書が届いたわけでございます。

それから小岩井浄先生は、専任教授として赴任しておられました。教職の方は全部が同じキャンパスに住んでおられましたので、教授と我々の間柄は非常に密接な関係にございました。小岩井先生には、尾行が付いていたと聞いております。不思議なことに、学校の中に憲兵の分遣所がございまして、確か図書館の下にあったと思います。別に書院を警戒しているというわけではございませんでしたけれども、夕食をとったあとゼミの学生はよく先生と散歩をしたものでございますが、憲兵が後ろに付いていることがありました。生活は非常に不自由であったかと思えます。私たちは「東亜開拓論」ということで、植民政策を先生にお習いしました。

質問者 A 小岩井先生はのちに愛知大学の学長を務められまして、非常に有名な先生でございましたので、おうかがいいたしました。それから一番目の質問なのですが、先生が学生時代に調査活動をされた場所を、おうかがいしたかったのですが。

宮田 あ、それは江蘇省の丹陽、仁丹の丹に、太陽の陽と書くところでございます。無錫から南京へ、ちょっと寄ったところでございます。

質問者 A わかりました。どうもありがとうございました。

司会 ほかにありますでしょうか。

質問者 B 先生の今のお話をお聴きしまして、今のご質問と絡めて、文化人類学的なそういう調査をされたのに、その後中国語の専門の先生、研究者になられていったというのは、どういうことなのでしょう。

宮田 (苦笑) 私にもわからないのでございますけれども、軍隊生活をやっているうちに、

学んだことをすっかり忘れてしまったのでしてね、軍隊から解放されて市民になった時に、自分の頭に残っているのは、中国語しかなかったのです。それだけのことです。特に理由はございません。でも今でもやはり、いわゆる民俗学的なことを研究したいという気はございます。まあ能力も時間もございませんし、断念して、語学に専念した、というようなところでございます。

質問者 C 私は戦後生まれなものですから、よくわかりませんが、この東亜同文書院というのは、ほかの場所で当初創られて、上海へ移ったと聞いているのですが、この学校を創ろうとした基本的な理念というのは、最初どういうものであったのですかね。

宮田 私は特に研究しているわけでもございませんので、十分にはお答えできないかと思えます。これは専門家の藤田先生にお願いしたほうがよいと思えますが、藤田先生、いかがでしょうか。

藤田 振られましたね（苦笑）。お話するとずいぶん長くなりますので、かいつまんで申しますと、最初（の時期のこと）は、このあと 3 人目の発表でいたしますので、ちょっと期待していただきたいかと思えます。近衛篤磨公、荒尾精、それから根津一という、3 人の方が設立に関わっています。一番初めは近衛篤磨公が、清国の地方官僚の方々と相談して、列強が中国に入り込んで、やがては日本に来るだろうということを考えて、それに対抗するには、日本と清国の間での教育文化交流事業が一番必要だ。清国や朝鮮半島もそうでしたけど、国民の教育レベルを上げる必要がある、というようなことを考えて、教育交流事業をやりました。そこで清国の高官の支持を得て南京に学校を開設したのです。それが南京同文書院です。

ところが設立して半年もたたないかのうちに、義和団の乱が発生して、それが当時の清国の南京に迫りつつあって、これは危ないというわけで、上海へ移るのですね。その時荒尾精、彼はお父さんが尾張藩士で、明治維新で失業して一家で東京へ行ったあと、麹町警察署の書生として雇われて、ここで初めて清国や朝鮮との、国際的な背景をいろいろ勉強して、清国に関心を持ったのですね。その過程の中で、今度は日本と清国との関係を、貿易をすることでレベルアップをして、列強と対抗しよう（考えた）。近衛篤磨公は教育に対して、荒尾精は日中間の貿易で、さっきビジネススクールというお話がありましたけど、実務者を養成するという考え方が合体統一したのです。しかし、貿易実務は簡単にはできません。中国側は中間業者の買弁が力を持っていて、列強との貿易実務を中間で差配していて、利益を取ってしまっていたからです。そこで、そうではなくて、現地の人たちと直接取引できる中国語をマスターして、しかも貿易実務をきちんとやる。次に発表されます三好（章）先生のところで（出てくる）、根岸（佶）という先生は学生に、貿易実務の実習を上海のほか、漢口や天津や北京でやらせて、しかも中国語を徹底的に勉強させて、貿易ができるような人材を作り始めました。そのあたりのところが最大の目的だったのですね。そういった形で、上海に統合して、今度は東亜同文書院という名前で、1901（明治 34）年に新たに誕生する。南京にできたのはその 1 年前、1900 年に開校して、その学校は南京同文書院、上海にできたのは上海東亜同文書院でした。

質問者 C 私が知りたかったのは、当時の明治政府が、要するに日本が清国を統治しようという目論見で創った学校なのか、あるいは日本と清国がともに発展しようという思いで創ったのかと。インターネットで見ると、そういう大学を日本の軍の偉い人が利用して、軍に有利なような流れのほうにしていっていったのではないかというのが、私の記憶に

あるので、果たして学校を創った基本的理念がどこにあったのか、ということでした。ですから最初は、日本と中国の交易を発展させようというのが基本的理念なのですね。

藤田 そうです。おっしゃったような、中国侵略のための何とかというのは、インターネットで見るといろいろ出てきますが、これはウソですね。戦後のイデオロギーの中で作り出されたもので、たとえば近衛篤磨公は、薩長などの藩閥政治や軍隊が大嫌いで、政党政治もまだ頼りにならないから大嫌い。したがって明治政府から憎まれて、なかなかお金を出してもらえなかった。そういうことがありました。

質問者C 要するに、日本と清国が仲良くしようという思いだったのですね。

藤田 特に列強に対して、何とかしないと日本もやられるであろうという危機感を持っていましたね。

質問者C 列強というのは、ヨーロッパですね。

藤田 そうです。軍部が書院を利用しようということをしたわけではない。

質問者C どうもありがとうございました。

宮田 藤田先生、ありがとうございました。

司会 他にご質問はいかがでしょうか。よろしかったらもうひと方ほどお願いします。

質問者D 先生が東亜同文書院に入学する前と、したあと、それから戦後で、中国観というのは、民衆の中で学ぶという理念だったとのことですから、中国の民衆に対する見方というのは、どう変化したかということについて、教えていただきたいのですが、よろしいでしょうか。

宮田 私は学校に入る前は、まだ中学生でございまして、それほど深く考えたことはございませんでした。でも私の祖母は、「支那」という言葉は絶対使いませんでした。「清国」という言葉を使っております、日清戦争が始まった頃は「あんな大きな国と戦争して、いったい日本はどうなる」と、娘心に非常に心配した、というようなことを言っております、私はその祖母の影響を非常に受けて、いわゆる「支那人」と呼ぶようなことは、あまり考えておりませんでした。

それから中国に渡りましてからは、中国人は常に私の隣人でした。隣人で嫌なところもままありますけれども、隣人として頼みがいもある人である、というのが私の考えで、いろんなこともございましたが、全体としてはやはり我が友である、という気持ちは今も変わっておりません。

質問者D ありがとうございました。

司会 はい、いくつかご質問をいただきましてありがとうございました。それでは宮田先生、長時間どうもありがとうございました。

宮田 どうもありがとうございました。